

論文

植民地と故郷 ——清岡卓行、三木卓、後藤明生（前半）

佐藤 亨

キーワード

清岡卓行
三木卓
後藤明生
植民地
故郷
異邦のふるさと

目次

序 異邦のふるさと
1. 清岡卓行、『アカシヤの大連』
1－1 都市と肉体
1－2 「〈真実のふるさと〉」と「〈にせのふるさと〉」
1－3 アマルガム
1－4 「遠心にして求心たる」

注

序 異邦のふるさと

2005年に『異邦のふるさと「アイルランド」』という本を出した。拙著では「異邦」と「ふるさと」をキーワードとしながら、4つのアイルランドを想定した。すなわち、(1) 祖国（ふるさと）が植民地（異邦）となった先住者にとってのアイルランド、(2) 英国本土からアイルランドという異邦に移住し、そこをふるさととしていった入植者にとってのアイルランド、(3) 祖国アイルランドをあとにし、アメリカ、オーストラリアなど異邦に渡った移民にとってのアイルランド、(4) 丸山薫の「汽車に乗つて／あいるらんのやうな田舎へ行かう」という詩の一節にみられるように、明治以降の近代化や西洋化、さらに戦後の高度経済成長で都市化が加速し、田園風景を失い、ふるさを喪失したわれわれ日本人にとってのアイルランド、である。

さて、本稿があつかう3人の作家は日本の作家である。そして、異邦とは中国大陆や朝鮮半島などの旧植民地である。作家たちは、そこで生まれ、あるいはそこに移り住み、育った。入植者という意味では、(2) に当てはまるが、その後、異邦に根を下ろしたわけでない。敗戦によって日本に引き揚げざるをえなくなったのである。本論を名づけるなら、引揚者にとっての「異邦のふるさと」論ということになる。

清岡卓行（1922-2006）は満鉄（日露戦争の終結後、ロシアから譲渡された南満州鉄道のこと。新京（現長春）・旅順（現旅順口区）間を結ぶ）の技師の父のもと、大連で生まれた。地元で教育を受けるが、高校の時に文学研究を目的に日本にもどり、その後、東京大学に入学。1945年、敗戦を前に友人2人（1946年に自殺し『二十歳のエチュード』が死後出版された詩人、原口統三と、後年、ロシア文学者となった江川卓）と大連に逆もどりし、教員などをして48年まで居続ける。それから引き揚げ、49年に大学を卒業する。三木卓（1935-）は東京で生まれるが、2歳の時、元アナキスト詩人で編集者の父と大連に渡り、新聞記者となった父の勤務の関係で奉天（現瀋陽）、新京（現長春）と移り住む。45年、敗戦直後に父を感染症で失くし、日本への帰路の最中、祖母を失くす。引き揚げは翌1946年。後藤明生（1932-1999）は現在の北朝鮮の咸鏡南道永興郡に商店を営む家に生まれ、終戦の年に引き揚げた。その途中に父と祖父を失くす。

3人の人生は十五年戦争とその時代に翻弄された。共通していることは、敗戦によって、土地を支配する立場から、土地を明け渡し、出ていく立場となった点である。いわば、入植者から引揚者となった。その際、故郷を失った。あるいは、故郷は異邦のふるさととなったと言えよう。以上、共通点はあるが、入植先のちがいはもちろんのこと、当時の年齢、境遇、家庭環境などで体験がちがってくる。同時に、ふるさと観もそれぞれである。

清岡卓行の『アカシヤの大連』にはつぎのような一節がある——「彼は、自分が日本の植民地である大連の一角にふるさとを感じているということに、なぜか引け目を覚えていた。もし、このことを他人に聞かせたら、恥かしい思いをすることになるのではないかと不安であった。というのは、この都会とその周辺には、土着人の墓場しかないということを、彼はすでにしてよく知っていたからである。つまり、大連に住んでいる彼の前世代の日本人たちは、心の中で、日本の内地のどこかにある自分のふるさを大切にし、骨になったらそこに埋めてもらいたいと思っているようであった。また、

彼のようないわば植民地二世は、年齢のせい、まるで根なし草のように、ふるさとの問題意識をふつうは持っていないようであった」(144-45)⁽¹⁾。

一世は日本をあとにしてきたゆえに故郷は日本にあるが、二世になると故郷は植民地にある。主人公の両親は高知県出身であり、彼自身も徴兵検査の際に訪れ、素朴で静かな田園風の土地を気に入っているのだが、「これが自分のふるさとだという実感は、どうしても湧いてこない」(144)という。理由は明白である——「なぜなら、彼が生れて、幼年時代と少年時代を送ったところは、その植民地以外にはなかったからである」(142)。

清岡にくらべ、2歳で中国に渡り、10歳で引き揚げた三木は植民地とか祖国という認識がうすい。ただ、引き揚げ体験をとおして、植民者という身分から転落したことを知る。短編小説「流れのほとり」には、引き揚げ船を待つ少年の思いが語られる——「おれはどうなるのだろう、と少年は思った。海のむこうにある国へむかって、人々は流れていくが、そこはどんな所なのか、見たことがなかった。この土地では、今まで、自分では気がつかなかったが、自分たちはよい思いをしてもらっていたらしい。戦いが終わってから、この土地の人間が植民者である自分たちにむけた眼は怒りにあふれていた。植民者たちの生活はあらゆる権益を失い、最悪となった。少年には、まだ国家という観念は理解できていなかったが、自分たちをこの土地へ来させ自分たちを庇護していたものが一挙に崩れ去ってしまったことは感じていた。自分らは巢の袋から追い出されたみのむしのようなものだ」(206-7)⁽²⁾。

三木は満洲での生活と引き揚げによってアジアというものを強く意識する。満洲での子ども時代、遊び相手は日本人の子どもであり、遊びは戦争ごっこだったものの、彼が属した日本人社会は被支配者の中国人や朝鮮人社会に包囲されていたのである。満洲はアジアの縮図であった。「われらアジアの子」という作品のタイトルは、引き揚げをふくむ植民地体験で自覚した(あるいは自覚させられた)日本の子どものもう一つのアイデンティティを言い当てている⁽³⁾。

後藤明生も終戦によって故郷を失った。しかし、それは奪われたのちがうという。「父への手紙」にはこうある——「戦争が終ったとき、わたしの少年時代は、終わりました。そしてわたしは、同時に『生まれ故郷』を失ったわけです。つまりわたしたちは『生まれ故郷』を追放されて、『祖国日本』へ引揚げてきたわけです。かつて日本の植民地であった朝鮮半島が、朝鮮人達の祖国に返ったことには、わたしも異存はありません。そのために、かつて植民地としてそこを支配していた日本人の子孫の一人であるわたしが、そこから追放されたことに対しても、べつに異存はありません。したがってわたしは、『生まれ故郷』を追放されたとは考えても、決してそこを奪われた、とは考えておりません。もともとそこは朝鮮人のものだったからです。朝鮮人のものが朝鮮人に返った、わけです。しかし、だからといって、わたしが『生まれ故郷』を失ったことには変りないでしょう」(51-52)⁽⁴⁾。

生まれ故郷を追放され、故郷を失ったと認めながら、それでも奪われたのではないという微妙な言い分。国そのものが相手に返還され、故郷が自分たちのものではなくなっても、依然として自分たちの故郷であるという二重性。これはたとえば、両親が離婚しても、自分にとって、実父、実母にはかわりはないということと似ているのだろうか。いずれ、引揚者は突然に故郷を奪われた。植民地であろうと生まれ育った土地にたいする愛着はかわらない。したがって、とくに少年時代や青年時代を異

邦で過ごした者にとって、故郷は、国が相手に返還されたとして、故郷でありつづけるのだろう。

それでは、旧植民地で生まれ、あるいは、育った3人の小説家にとっての、三者三様の「異邦のふるさと」を見ていきたい。

1. 清岡卓行、『アカシヤの大連』

1-1 都市と肉体

『アカシヤの大連』は戦争を描いた小説でも、植民地主義を告発する小説でもない。敗戦、それに伴うソ連の侵攻、入植者の日本への引き揚げなどには言及されるが、それが前景となることはない。終戦間近、そして敗戦後の時代が背景であるが、全体のトーンは静かである。「日本人がその植民地で敗戦をどう経験したかということには、さまざまな場合があるだろうが、大連では、それは一般的に言ってそれ程悲惨なものではなかった」(191-92)という一節がしめすように、大連の特殊事情もあるだろう。しかし、それだけが原因ではない。

一人称の回想で進行するこの小説では、状況は、回想であるゆえ、一定の距離をとって、しかも、主人公との関わりにおいてとらえられる。主人公は大連生まれだが、日本の大学に進学した。高校時代に日本にもどり、二年生のとき、運良く学徒動員による召集をまぬかれた。検査書類にあった「休学中」が「胸の病気」(結核)と誤解されたとある(119-20)。かといって、動員を望んでいるわけではない。もともとそれは望まず、むしろ大学生として学生時代というモラトリアム期を享受したいと思っている。この時期を「スポーツのように楽しい鍛練であるはずの哲学的な自己幽閉」の時期ととらえ、「休学してでも、経験する義務的権利がある」(105)と主張する。そんな彼が「臨時の隠遁」(104)先として選んだのが大連であり、そこは彼の生まれ故郷だった。

もう少し具体的に見よう。「少しは余裕のある家庭に育った」(104)彼は、地元にある旅順の高校に入学したが、「五箇月ほどで自分からそこを退学し」(127)た。理由は「一口で言えば、おこがましくも、文学をやりたいためである。(中略)ランボーを原語で読む勉強ができる高校にかわりたためである」(127-28)。彼は日本にもどり、東京の予備校に通い、その後、大学に進学し、フランス文学を学んだ。戦時下、文学を学ぶことは、理系の学生が兵役免除だったことを考慮すると、ある意味、反時代的だったと言える。付言すると、作者、清岡卓行は『ランボー詩集』(河出書房)を1968年に出版した。

東京の大学に進学した彼は対人関係(とくに女性)においてナイーブであり、「自殺への親愛」(102)も胸に秘めていた。そんな彼であるが、青春特有の勢いと無謀さで、終戦間際になって大連にもどることにした。こんな具合に大連行きが決まった——「三月十日に江東地区が大空襲されて、その上の夜空が血のように爛れているのを、二子玉川の近くのおれの下宿から、二人で情なさそうに遙かに眺めたときだったな、戦争はどうやら末期的症状だ、どうせいつか近いうちに兵卒として戦場に駆り出され、そこで死ぬことになるだろうから、その前にもう一度だけ、おたがいに実家がある大連を見ようじゃないかと話がまとまったのは」(110)。

このように大連行きはなりゆきで、しかも急に決まるのだが、主人公はそもそも活動的な人物では

ない。むしろ、行動するのが苦手な彼は内向的であり、旅行も「地獄に近いもの」(107)である。というのも、旅行は、「空間がどんなに広々と、美しく珍らしく展開されようとも、また、時間がどんなに明確に、区分され構成されようとも、それらはひとしく、強いられた移動を証している風景や地名の変化に過ぎ」(106)ないと、彼は考えるからである。

しかし、彼は大連にもどった。帰郷は旅行ではない。ましてや「強いられた移動」ではなく、「風景や地名の変化」を味わうものではない。帰郷は、ある意味、自分に帰ることである。異国といえども故郷である。だから大連のある満洲に到着するや、なつかしさを覚える——「列車は朝鮮を北上して、鴨緑江を越え、ようやく満洲にはいつている。安東を過ぎ、鳳凰城に近づいている。外は暗い。しかし、窓からはいつてくる、ひんやりと澄んで乾燥した空気を、胸いっぱいおいしそうに吸って、彼はこれこそ久しく忘れていた満洲の匂いだと思う」(133)。このように、彼にとって故郷は感覚的なものと結びついている。「彼の嗅覚によれば、日本の空気は微かに湿っぽく、朝鮮の空気は微かに乾き気味であるが、どちらも植物的である。それらに対し、満洲の空気はほんの少しばかり鉱物的である。石炭や鉄の匂いが、うっすらと漂っているようにさえ思われる。彼はそれが好きなのだ。」(133-34)彼の嗅覚の記憶の一番底にあるのは満洲の匂いであろう。

そのうえ、彼は故郷に癒される。「奇妙に抽象的である憂鬱」(101)から解放される。それは具体的なものと出会うからである。抽象的で形而上的な「憂鬱」は、具体的で形而下のものによって解放されると言えるだろう。その一つが大連という都市である。もう一つが女性である。

大連を描写する一節をあげる——「夕ぐれどき、彼はいつものように独りで町を散歩しながら、その匂いを、ほとんど全身で吸った。時には、一握りのその花房を取って、一つ一つの小さな花を噛みしめながら、淡い蜜の喜びを味わった。その灰かに甘い味は、たとえば、小学生の頃のかくれんぼ、高い赤煉瓦の塀に登って、そこに延びてきているアカシヤの枝の豊かな緑に身を隠し、その棘に刺さらないように用心しながら、その花の蜜を嘗めた、長く明るい午後などを思い出させた。そして彼は、この町こそやはり自分の本当のふるさとなのだと、思考を通じてではなく、肉体を通じてしみじみと感じたのであった」(143-44)。

このように大連の街は主人公にとって官能的である。この都市は「本当のふるさと」であり、「肉体を通じてしみじみと感じ」られる。つぎに女性を描写する一節をあげる。のちに伴侶となるこの女性は、彼にとって美の観念が具体化された存在、あるいは、具肉化された存在である。さりげない描写であるが、花の比喩が使われていることに大連という都市との結びつきを暗示する——「彼は、彼女がゆっくりと歩いて行く後姿を眺めていた。少し斜めにかぶっている帽子はフェルト、丸い山の部分が赤く、折返されたへりが紺で、明るく眩しい感じであった。その下からはみ出た髪は、若々しく豊かで、茶色いウールの短外套に少しかかっていた。薄青の細い毛糸で編んだ靴下は、膝の下までで、それと、比較的短い薄茶色のスカートの中で、白くふくよかな感じのひかがみがちらちらしていた。全体として、すっきりした趣味で、いくらかさびれている広場の中に、ふしぎな花がポツカリと咲いたような感じであった。ああ、きみに肉体があるとはふしぎだ！ 彼は自分の胸から不意に湧いてきたその言葉に、たじろいだ」(217-18)。

「ああ、きみに肉体があるとはふしぎだ！」——この一節は清岡の最初期の詩「石膏」にも見られる⁽⁵⁾。

氷りつくように白い裸像が
ぼくの夢に吊されていた

その形を刻んだ鑿の跡が
ぼくの夢の風に吹かれていた

悲しみにあふれたぼくの眼に
その顔は見おぼえがあった

ああ
きみに肉体があるとはふしぎだ (30)

この詩はギリシア神話のピグマリオン⁽⁶⁾の逆のパターンである。現実の女性に失望したピグマリオンは理想の女性を彫刻し、その像だけを愛するようになる。つまり、現実⁽⁷⁾に失望し、観念の世界に入る。いっぽう、清岡の詩は、自分が抱いていた（「ぼくの夢に吊されていた」）抽象（理想）が現実として出現することをいう。「見おぼえがあった」とはそのことを言っている。「ああ／きみに肉体があるとはふしぎだ」は、観念の女性が生身の女性にとってかわったときの驚嘆だろう。

以上、この小説は、大連という都市への帰郷ならびに一人の女性との出会いをとおり、青年の囚われた精神が解放されていく物語である。そういう意味で教養小説と言えるかもしれない。主人公の体験は、大連が匂いとか蜜の灰かに甘い味をとおして、また、女性が生身の肉体をそなえた存在としてとらえられているようにきわめて感覚的に描かれる。精神の解放は観念から経験（感覚）への脱却という一面をそなえている。

そして、大連という故郷でアカシヤと女性是一つになる——「彼は、アカシヤの花が、彼の予感の世界においてずっと以前から象徴してきたものは、彼女という存在であったのだと思うようになっていた」(219-20)。アカシヤと女性は融和し、アカシヤの大連は女性の大連になっていく。あるいはこうも言える。もともと大連は女性のイメージでとらえられ、その大連で出会った女性が、大連の隠喩であるアカシヤと結びつくようになった、と。小説にはこんな一節もある——「激烈な戦場と結びつく旅順のイメージが男性的であったとすれば、いかにも平和に相応しい大連のイメージは女性的であった。そう言えば、彼がときどき復習するフランス語でも、旅順は男性名詞であり、大連は女性名詞であった」。(181)

伝記的に言うと、清岡は1945年に大連に渡り、47年に沢田真知と結婚、そして翌48年に引揚船で大連から舞鶴に渡る。角川版詩集に付されている年譜には、大連での3年あまりの生活について、「かつての日本の植民地における戦後の明るい混乱の中で、数年来の〈憂鬱の哲学〉を忘れる」(253)

とある⁽⁶⁾。この大連での体験が小説の肝であり、アカシヤの大連は沢田真知の大連でもあった。

1-2 「〈真実のふるさと〉」と「〈くにせのふるさと〉」

小説はこう始まる——「かつての日本の植民地の中でおそらく最も美しい都会であったにちがいない大連を、もう一度見たいかと尋ねられたら、彼は長い間ためらったあとで、首を静かに横に振るだろう。見たくないのではない。見るのが不安なのである。もしもう一度、あの懐かしい通りの中に立ったら、おろおろして歩くことさえできなくなるのではないかと、密かに自分を怖れるのだ」(87)。

「おろおろ」するのは大連が「懐かしい」からであって、入植者としての罪悪感からではない。そこはあまりに多くの思い出が詰まった町なのである。小説はこう続く——「それは、彼が生れ、幼年時代と少年時代を送った町である。いや、それだけではない。第二次大戦があと五箇月ほどで終わろうとしていた頃、東京のある大学の一年生であった彼が、抑えがたい郷愁にかられ、病気でもないのに休学して舞い戻った、実家のあった町、そして、やがて祖国の敗戦を体験し、そのあと三年もずるずると留ることとなり、思いがけなくも結婚した町である」(87-88)。

大連を「もっとも美しい都会」と形容した清岡は、『アカシヤの大連』ばかりでなく、多くの大連物を残しているが、その一つ『大連港で』というエッセイのなかで大連（とりわけ、「大きな円形広場である中山広場」(156)）と自分の関係について述べている——「都会で生まれ育った少年が、ときとして本能的に、なぜかその都会のある決まった場所で、きらびやかな人工のなかの自然の深さを、寂しさの情緒を通じてこそ感じとるということ。そして、この寂しさの情緒にはやがてある安らぎへの意志が重なってきて、ふるさとを生なましく意識させるということ」(156)⁽⁷⁾。そして、この「都会」ないし「ふるさと」は、清岡にとって日本ではなく、大連なのである——「私は自分の少年時代をふりかえてみて、都会と自然にかかわるこのような生活感覚の重層の契機を懐かしく思いださないわけにいかない。私の場合の不幸は、その都会が祖国の土地の一部ではなかったということだ。しかも、その都会に生涯を通じて執着するらしいということだ」(156)。

清岡にとって故郷は祖国にあるのではない。「まるで根無し草のように」(『アカシヤの大連』145)と言いながら、異邦のふるさと、大連に「執着」し続ける。清岡は1948年の夏に引き揚げ、1982年の冬に34年ぶりに大連を再訪し、それを文章にしているが、その執着ぶりが伝わってくる。忘れるなどということは絶対できないのだろう。

さて、異邦のふるすとは、『アカシヤの大連』において、「〈くにせのふるさと〉」と呼ばれている——「彼はふと、自分が大連の町に切なく感じているものは、主観的にはどんなに〈真実のふるさと〉であるとしても、客観的には〈くにせのふるさと〉ということになるのかもしれないと思った。なぜなら、彼の気持は、大連のほとんどの日本人たちから見れば、愛国心が欠乏しているということになるだろうし、土着の気骨ある中国人たちから見れば、根なし草のたわごとということになるだろうと想像されたからである。このことが、彼の内部のどうしようもない矛盾に対応していることにも、彼は気づかないわけにはゆかなかった。それは、自分が大連の町にしか〈風土のふるさと〉を感じないのに、もう一方においては、日本語にしか〈言語のふるさと〉を感じないということであった」(145)。

清岡が「〈風土のふるさと〉」と「〈言語のふるさと〉」を区別し、それぞれ大連と日本に対応させるのは、彼自身、入植者ないし支配者という立場で大連に生まれ育ったので、大連の言語（中国語）の使用を強制されなかったということがある。また、「ふるさと」の分裂は「シーソー・ゲーム」とか「矛盾」として、以下のようにも告白される——「それにしても、なんというシーソー・ゲームだろう。東京で高校の寮にいれば、勉強や友人たちにいつのまにか新鮮な魅力がなくなって、言い知れぬほど大連の家庭が恋しくなる。大連に戻ると、今度は休暇にしないで退屈して、東京で新しい研究かなにかを無性にやりたくなる。彼はその矛盾をすでに意識しはじめている」（126-27）。

さて、清岡は「主観的」には「〈真実のふるさと〉」である大連が、「客観的」には「〈にせのふるさと〉」であるというものの、「にせ」は本物にまざることを、アカシヤの比喻であかす。中学時代の体験である——「中学校の三年生のときであったか、彼は学校の博物の授業で、先生からアカシヤについて教わった。それによると、大連のアカシヤは、俗称でそう呼ばれているので、正確には、にせアカシヤ、いぬアカシヤ、あるいはハリエンジュと呼ばれなければならないということであった」（146）。そして、この中学三年生は大連にあるアカシヤ（本物のアカシヤ）を見て、こう思う——「彼は、しかし、本物の二本のアカシヤを眺めたとき、安心した。なぜなら、にせアカシヤの方がずっと美しいと思ったからである」（147）。

大連のアカシヤはにせアカシヤである。しかし、にせアカシヤは本物のアカシヤよりも美しい。「にせアカシヤは、樹皮の皺が深くて、それが少し陰気であるが、幹は真直ぐすうりと伸び、そのかなり上方ではじめて多くの枝が分岐し、それらの枝も素直に横にひろがって、全体として実にすっきりした形をしているが、本物のアカシヤは、幹が少し曲っており、本数の少い枝もなんとなくひねくれた感じでうねっており、どうも恰好が悪いように見えたのである。」（147）

彼は最終的に、「にせアカシヤ」を「アカシヤ」と呼ぼうと決める——「どこの愚かな博物学者がつけた名前か知らないが、にせアカシヤから『にせ』という刻印を剥ぎとって、今まで町のひとびとが呼んできた通り、彼はそこで咲き乱れている懐かしくも美しい植物を、単にアカシヤと呼ぼうと思った」（147-48）。

にせのアカシヤが本物のアカシヤより美しいように、異邦のふるさは祖国のふるさよりも美しい。というより、植民地に生まれ育った清岡には祖国にふるさとはないのである。「〈にせのふるさと〉」からも「〈にせの〉」がはく奪される。

1-3 アマルガム

大連の美しさは「アマルガム」にあるといえよう。これはもともと「水銀と他金属との合金」のことであるが、清岡はそれを「国際性」という意味で用いている。平たく言うと、文化の融合である。言うまでもなく、大連は、不凍港を手に入れたと思っていたロシアが日清戦争後の1898年に手にした遼東半島先端部に位置し、その名はロシア語の「ダルニー」（「遠い」を意味する）に由来する。帝政ロシアは7年間この地を統治し、パリをモデルにして都市計画を進めた。その後、1905年、日露戦争による日本の勝利によって、この土地の租借権は日本に移り、帝政ロシア統治の鉄道と港湾、

街路や建築物などを譲り受け、日本側はロシアの計画をさらに発展させる。関東総督府は満鉄を整備し、西欧風の都市を建設した。以後、1945年の終戦まで日本は統治する。満洲の都市としてのモダンさは、ロシアの計画に負うところも大きい、総督府の方針によるところも大きかった（以下、引用文中、後藤とあるのは満鉄の初代総裁、後藤新平である）——「満洲経営にあたり、後藤が掲げた有名なキャッチフレーズがある。『文装的武備』だ。つまり、軍事力・警察力による“力づく”の統治ではなく、高度な文化・インフラ・生活を向上させることに重点を置き、世界に互^こしていく街に発展させるというものだ」（214）⁽⁸⁾。

『大連港で』には、「ダーリニ市庁の新しい建物は、かつてイギリス領事官であり……」、「チエホフの芝居が演じられ、チャイコフスキーの音楽が鳴ったであろう劇場は、かつて東洋拓殖大連支店であり……」、「ダーリニ警察・消防署は、かつて満鉄のヤマトホテルであり……」（158）という一節があるが、大連は支配者が代わるごとに住民が代わり、建物の用途が変わってきた。領事館が市庁舎に、劇場が銀行に、警察・消防署がホテルにという具合に。こうして大連は持続する。

清岡はここで植民地主義を肯定しているのではない。その支配者が代わり、街を形成してきた歴史、そこにはからずも「国際化」が生じ、それをアマルガムと形容しているのである。じつは『アカシヤの大連』の主人公の父も、大連ではないが、旅順という中国の一都市の変容（アマルガム）に参加した一人なのである——「旅順は、列車の発着する駅がある狭くて比較的賑やかな旧市街と、ひろびろとして実に閑静な新市街とに、川で分けられている。それらの二つの部分をつないでいる鉄橋を見て、彼は幼い誇りを感じる。先生や友だちには喋らないけれども、それは彼の父が作ったものなのだ。両側の欄干がそれぞれ大きな円弧を描いている、どことなく古典的な形態、それには〈にほんばし〉という名前がつけられている。それは、彼の父が初めて満洲にやってきて、若い土木技師として関東州庁に勤めたときのいわば処女作であった。しかも、それは、彼の父の長い経歴において、設計から現場の工事監督までの全過程を担当した唯一の仕事なのであった。そのため、彼の父にとってはことさら愛着が深い鉄橋であるらしく、その気分が子供にもなんとなく影響しているのである」（130-31）。

他国をみずからの領土とし、都市を計画し、橋を架け、それに「〈にほんばし〉」という名前をつけるという行為は植民地化の一環なのだが、文化的にはアマルガムないし国際化という見方も可能である。こうした見方に立つと、敗戦によるソ連軍の進駐は、単なる乱暴極まる侵入という側面だけではなく。『大連港で』において清岡はまずは事実をおさえる——「敗戦による秩序の逆転は、大連においては幾重にも独特に複雑であった。日本が敗北し、中国が勝利したとき、そこへ進駐してきたのはソ連軍であった。そして、それまでの資本主義から社会主義への転換が、場合に依^よじて緩急さまざまに行われていた。おまけに、こうした表面的な変化に、歴史的な因果関係が深くかかわっていた」（79）。

興味深いのはこのあとの一節で、「日本人にとって思いがけなかったソ連の軍人の気持ち」（79）と定義したうえで、二例紹介される。ひとつは旅順にたいしてで、ロシア軍人には先祖が日露戦争で戦った土地のため、そのときの提督の名を口にし、記念のために土を持って帰った人もいたことが挙げられる。そしてふたつめは、ロシア人は大連にも思い入れを持っている点である——「ソ連の将兵が大

連について、帝政ロシアが建設した都会だからヨーロッパふうな美しさをもっていると考えており、そのための親愛感をやはり示したことである。日本人にとってこのことは、思いがけないというよりむしろ衝撃であったにちがいない。日本人は自分たちこそ大連を建設したと思っていたからである。どちらにも言い分があり、どちらも倨傲であった。最初の五年間ほどにおける見事な都市計画と少しばかりの建設はロシアが行い、その後四十年ほどにわたる継続の建設と新規の設計ならびに建設は日本が行ったからである」(79-80)。ここまでだと入植者側、支配者側の視点しか入っていないが、清岡はこう付言する——「いや、およそ四十五年というこの期間を通じて実際に労働したのはほとんどすべて中国人である。したがって、中国人が建設したとも言えるはずである」(80)。これとて、中国人が支配者側に労働力として酷使されたのだから、中国人による建設というのは支配者側の植民地化の一環だという見方もできる。しかし、清岡が力点をおくのは、大連という都市がハイブリッドであり、そのぶん国際的だという点なのである。

『アカシヤの大連』にもどろう。清岡にとって大連は植民都市であると同時に、アマルガムの都市である。国際都市であり、そして、モダニズムの都市でもある。その一例として安西冬衛をあげる。

大連にはおおくの文人や芸術家が渡り、創作活動を行ったが、その一人が詩人、安西冬衛である。安西は21歳から36歳まで当地で暮らした。安西は「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた。」(「春」)で知られる詩人であり、清岡は安西冬衛の詩にこそアマルガムを見る。ある種のモダニズムを感じているのだろう。「それは一口で言うと、凝縮された国際性であった」(183)と述べたあと、安西が中心となって発行した前衛的な詩誌『亜』を次のように評価する——「短詩運動という名前が示しているように、『亜』の連中の詩には一行か数行のものが多かった。それは、形式の上で言うと、口語自由詩の一つの極限的な凝縮であり、本人たちあるいはその周囲も意識していなかったかもしれないが、密かに、伝統的な短歌や俳句の凝縮性に通底しているように彼には思われた。そしてその内容は、少くとも優れた詩作品である場合は、巧まざる単純な国際性であるように彼には受け取られたのであった。いわば、形式における求心性と、内容における遠心性。それらの緊迫した対応のうちに湛えられた新しさは、彼の判断によれば、時間の経過によって錆びつかないアマルガムの状態になっていたのだ」(183)。

異邦で開花した日本文化のアマルガム性に清岡は注目し、安西の詩は大連でしか書けなかったと見る。詩人の想像力が「てふてふ」のように飛ぶのは、大連という国際都市に住んでいたからだ、と——「……日本とソ連が向いあっている海峡、しかも、韃靼という言葉によって暗示される古い時代や遠い別な国とのかかわり、そうしたものの巧まざる集中には、詩人が立っている日本所属の国際都市の本質が、いくらかデフォルメされながらも、天衣無縫と呼んでもいい深い単純さで投影されているように、彼には感じられたのであった。その場合、可憐な蝶の羽搏きは、もちろん、詩人の魂のたゆみに他ならなかった」(185)。

1-4 「遠心にして求心たる」

「アカシヤの大連」の主人公は、ふとしたことで故郷を思いだす。現在、東京で家庭を持っている彼は、長男のために地球儀をデパートで買い求め、電車で帰宅途中である。そのとき、乗客の携帯ラジオからニュースが漏れ聞こえてくる——「——パリ九日発。フランスのド・ゴール大統領のアルジェリア政策が支持されました。フランス本土で七十五パーセント、現地では、中間報告によりますと、六十パーセントの賛成票を獲得しました。しかし、棄権者も多数にのぼる見込みです……」(91)。

アルジェリア(1830年以来仏領)で、第二次世界大戦後、独立運動がおこり、1954年、民族解放戦線が武装蜂起してアルジェリア戦争が始まる。植民者側は「フランス人のアルジェリア」を掲げて抗戦し、ド・ゴール政権に形勢挽回を期待したものの、ド・ゴールは「アルジェリア人のアルジェリア」を支持し、62年の独立を導いた。

なぜにアルジェリアが故郷を思い出させるのか。大学でフランス文学を学んだ主人公にとってフランスは単なる異国ではない。ましてや、アルジェリアは単なる植民地ではない。彼にとってアルジェリアと満洲は交叉する。それゆえ、「アルジェリアで生れ、そこで育ったにちがいない多くのフランス人の子弟のことを連想し、ふしぎな親しみを覚え」、「なんとなく、そうした青春に語りかけてみたい衝動を感じ」(92)る。「その言葉は、こんなふうに湧いてきた。——きみたちは早くフランスの本国に帰ったほうがいいよ、頑固な親たちを説得するのは大変だろうけれども、あの光栄ある伝統の国へ戻ることに、何の支障もないではないか、ふるさとは、忘れることができるものなのだ……。」(92)

かつて満洲にいた日本人はアルジェリアにいるフランス人にむかって、本国(「あの光栄ある伝統の国」)に帰ったほうがいいと思い、「ふるさとは、忘れることができるものなのだ」という言葉を漏らす。しかし、そう言うや、その言葉は自分に降りかかり、自問しはじめる——「ふるさとは、忘れることができる! 今度は、彼の心の方がその暗示的なせりふを追いかけはじめ、自分にとってふるさととは何であったのかと、鋭い痛みをともなう思いに駆られたのであった」(93)。日本で日常生活を営んでいるものの、ふと、異邦のふるさとに足をすくわれる。主人公が地球儀を抱えているは象徴的である。

「平生は、四十代も半ばを過ぎた大学の語学教師である彼の、遠い生れふるさとは、記憶の底に深く眠っていると言ってよかった」(98)とあるように、故郷はつねについて回るのではない。ふだんは意識下にある。それはほかでもなく、日本に引き揚げってから時間が経過したからである。アルジェリアの報道や妻の死をきっかけとして、大連時代が心にもどってくる。しかし、時事ニュースをきっかけとして主人公を大連に連れもどすのはなぜだろう。答えは単純である。「ふるさとは、忘れることができる」ものではないからである。そして、「鋭い痛みをともなう」のは、彼が故郷大連で出会い、結婚した女性を最近失くしたからである。そのことがいっそう大連への郷愁を駆り立てる。故郷は「記憶の底に深く眠っている」ものの、依然として、彼の一部なのだ。

清岡にとって大連は、遠心的かつ求心的な円である。故郷を遠く離れても、そこに吸い寄せられる。円形広場こと中山広場は、先に引用したように「ふるさとを生なましく意識させる」場である。「円き広場」の一節をあげる——「わがふるさとの町の中心／美しく大いなる円^{まろ}き広場／そは 真夏の正

午の／目覚めのごとく／十条の道を放射す／^{すなは}即ちまた そのままにて／十条の道を吸収す／おお 遠心にして求心たる」(38-39)⁽⁹⁾。

こうして書くと、清岡は美しか描いていなく、引揚者の苦労などには目をつむっているように受け取られがちである。そうではない。清岡は戦争も引き揚げも体験した。しかし、終始、戦争を憎んだ——「彼は、全く意外にも、自分もやはり〈戦争の子〉ではなかったのかと感じた。——おお、戦争を嫌いぬき、戦争からできるかぎり逃げようとしていた、〈戦争の子〉」(190)。『アカシヤの大連』が、戦争の臭いがせず、審美的ですらあるのはその中核をなす大連という都市と女性が戦争を越えた存在であるからかもしれない。女性も大連も、戦争のさなかにあっても、「輝かしい裸体」をもつ。「引揚者たちの海」の一節を最後に引く⁽¹⁰⁾。

海はほんとうは動いていないのに
過ぎ去るものは
海に眠る人間たちであるのに
長い年月の植民地生活から
明日の生活の見知らぬ廃墟へ
その隠された落し穴へ
かれらが絶え間なく運んでいるものは
死だけであるかもしれないのに

——どうしてきみは なお輝かしい裸体であったのか (51)

(この稿、続く。)

注

- (1) 清岡卓行『アカシヤの大連』(講談社、1970年)。引用箇所にはページ数を記した。
- (2) 三木卓『砲撃のあとで』(集英社、1973年)。引用箇所にはページ数を記した。
- (3) 三木卓『われらアジアの子』(文藝春秋、1973年)参照。
- (4) 後藤明生『思い川』(講談社、1975年)。引用箇所にはページ数を記した。
- (5) 清岡卓行『日本の詩集 18 清岡卓行詩集』(角川書店、1972年)。以下、『清岡卓行詩集』と略記する。引用箇所にはページ数を記した。
- (6) 『清岡卓行詩集』。
- (7) 清岡卓行『大連港で』(福武書店、1987年)。引用箇所にはページ数を記した。
- (8) 喜多由浩『満洲文化物語——ユートピアを目指した日本人』(集広舎、2017年)。引用箇所にはページ数を記した。
- (9) 清岡卓行『円き広場』(思潮社、1988年)。引用箇所にはページ数を記した。
- (10) 『清岡卓行詩集』。

本研究は青山学院大学経営学部経営学会から研究助成を受けた。記して感謝する。